

# 研究結果報告書

## 研究結果

本研究の目的は、主に安岡章太郎の家族小説を探求することで、戦後における「家族」の実態を把握することにある。そこで、注目するのは、安岡文学研究において見落とされがちだった、作品における「父子関係」の内実についてである。その一例として初期作品「剣舞」(1953.7)が挙げられる。

「剣舞」は「悪意」が込められる視線で父を眺める描写が少なくないため、従来「父否定」の作品として捉えられてきた。しかし、主人公である 僕 の葛藤の様相や心境変化などに注目してみると、次のようなことが言える。つまり、作品において、戦後社会に適応できない父親像が描かれているのは確かだとしても、それを眺める

僕 の視線が「悪意」あるものだとは言い切れない。その視線の背後には、もっと複雑な情緒が潜んでいることも見逃してはならない。 僕 は父のことを家族だと思っているからこそ、自分の考えを疑ったり、葛藤したりしているのだと言える。

敗戦は、民法のあり方を変え、古い「家」の観念を法的にも崩壊させた。そして、父親の権威は失墜するに至り、親子の関係も縦の関係から横の関係へと変貌した。さらに、父は敗戦によって自信をも喪失したと考えられる。そうした父を背負う 僕の重荷がいかなるものであったのかは想像に難くない。それでも、こんな父を見捨てるわけにはいかない。背中に子どもがいるため、自由に剣を振るうことができないが、子どもを捨てるわけにもいかない剣舞の男と同じように。なぜなら、二人は血縁で結ばれた親子なのだからである。

こうした、血縁を宿命として受け入れざるを得ないような気持ちが、もう一つの作品「家族団欒図」(1961.8)にも見られる。つまり、時代はどう変わろうと、家族というものは、血縁という絆で結ばれたものだという事は変わりようがない。このことを、安岡の作品を通して見出すことができると考えられる。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題目：安岡章太郎文学に描かれた 父と子 - 初期作品「剣舞」を中心に -  
(楊琇媚 台湾日本語文学会第267回例会 2011.2.19 台湾・台北)

題目：安岡章太郎「家族団欒図」論(発表予定)

(楊琇媚 2011年度台湾日本語文学国際学術研究会 2011.12.7 台湾・台北)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題目：安岡章太郎文学に描かれた 父と子 - 初期作品「剣舞」を中心に -  
(楊琇媚 『淡江日本論叢』第23輯) 論文審査中

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)